

ピレネーで見たジギタリス・プルプレア

長 岡 求

ジギタリス属 (*Digitalis*) はゴマノハグサ科として知られるが、分子系統学の成果をまとめた分類体系の APG II 及び APG III ではキンギョソウなどとともにオオバコ科に移されている。アフリカ北部の大西洋に浮かぶカーポ・ベルデ諸島からカナリー諸島、マデイラ諸島、アゾレス諸島に分布する低木状の3種は *Isoplexis* に分類されていたが、それも含めて、現在約22種からなる。それ以外の19種は欧州全域から中央アジアまで分布を広げ、いずれも草本性で、二年草または多年草である。属名の *Digitalis* はラテン語の指を意味する *digitus* に由来し、花の付き方が指を広げるように見えることによる。

表紙の写真はジギタリス属の代表種で、ジギタリス・プルプレア (*Digitalis purpurea* L.) である。種名の *purpurea* は紫色の花の色に由来し、common foxglove, purple foxglove, fairy fingers, fairy gloves, fairy bells, floppy dock, tod-tails などの英名があり、和名のキツネノテブクロは floxglove の和訳である。原生地は欧州中北部で、西はポルトガルから東はブルガリア、ポーランドまで、北はイギリスからフィンランドまで分布するが、スイス、オーストリア、コルシカ島などを除くイタリア半島、バルカン半島には分布していない。分布域から寒冷地の植物ということが出来る。また、その自生地は森林地帯の開けた場所がメインだが、パイオニアプランツとしても知られ、がけ崩れなどで生じた裸地に真っ先に侵入する植物でもある。その他、北米に帰化、野生化しており、米国中北部からカナダ、アラスカまで分布する。

植物全体に猛毒のアルカロイドであるジギトキシンが含まれ、自生地の欧州では大昔から薬草として知られてきた。古くは切り傷や打撲などに使われ、現在では人工合成されたジギトキシンが強心剤として利用される。日本のトリカブト同様に猛毒の植物で、アガサ・クリスティなどの推理小説で殺人に利用されることで有名である。本来は二年草または短命な多年草だが、園芸品種には秋まき一年草として栽培できるものもあ

り、一般には一・二年草として知られる。また、花色はもともと紫色だが、代表的な園芸品種のエクセルシオール・シリーズには黄色の品種もあり、花色の幅が広がっている。自生地では黄花種のグランディフローラ (*D. grandiflora*) や薄茶色のラナータ (*D. lanata*) との自然交雑種が確認されており、園芸品種もそれらと交雑されたものと推測される。

さて、表紙の写真はそのプルプレアの自生地で撮影したものである。花葉会主催のツアーでは2014年7月、ピレネー山脈の南部、スペイン側にあるサンマウリツジ国立公園を訪れ、正味5日間に渡り、山中に分け入り、ワイルドフラワーを視察してきた。プルプレアはそのコースの2か所で目にすることができた。一か所はバルセロナ (Barcelona) からレリダ (Lleida) を経由し、ビエルハ (Vielha) に向かう途中、標高1千メートルほどの峠の前後である。植生は森林というよりも牧草地で、道路沿いに群生するように育っていた。草丈は50cmほどの株がほとんどで、上記したパイオニアプランツといわれる状況を確認できた。もう一か所はビエルハの隣町ウンハ (Unha) の北にある森林の中で、写真はその林道脇で撮影したものである。こちらは森林の開けた土地に自生するものである。写真で分かるように狭い範囲に多数の株が育ち、中には草丈が1mを超えるものもあるなど、栄養状態はこちらの方が良いと推測された。ちなみに、標高は地図でチェックすると1千メートルほどであった。2か所の野生の株は私たちが目にする園芸品種と見分けがつかないほどだった。栽培されたものがエスケープした可能性もあるが、市街地から離れた土地にあることなどから、原生のものと判断した。実のところ、栽培種は野生種からそれほど育種が進んでいない植物のようだと感じた。